

令和 6(2024)年度 富山国際大学外部評価委員会 議事録

- I 日時 令和 6(2024)年 12 月 16 日(月) 17:30～18:50
- II 場所 東黒牧キャンパス本部棟 2 階大会議室
- III 出席委員 大橋委員、蒲地委員、東出委員、中島委員、松井委員、清水委員、田村委員
計 7 名 (欠席：濱名委員)

学内参加者 高木学長、大谷現代社会学部長、松山子ども育成学部長、彼谷運営管理部長、
佐藤総合学務センター長、上坂戦略企画部長、大平健康管理センター長、
川本キャリア支援センター長、高橋国際交流センター長、村上地域交流センター長、
佐藤図書館長、新森情報センター長・IRセンター長、小比賀事務部長、
上滝教務担当課長、石黒学生支援担当課長、酒井入試担当課長、
金岡総務課長[司会] 計 17 名

1. 開会

2. 学長あいさつ (高木学長)

地方の私立大学は大変厳しい状況にあり、少子化の中、学生募集の面でも財政面でも苦しい状況というのが正直なところ。大学の一番の使命、大切なことは良い教育を行い、学生を社会に送り出すことと考えており、この点についてはそれなりに自信を持って取り組んでいるが、それだけではなかなか学生・生徒やその保護者の方に振り向いてもらえないといったこともある。そういう意味で、本日は教育研究の面だけでなく、大学の広報活動や大学の運営などに関しても、アドバイスをいただけたらと考えている。本日はよろしく願います。

3. 委員紹介 (一覧資料にて)

4. 議事 (進行：大橋委員長)

(1) 令和 6(2024)年度の現状報告

○現代社会学部の概況について (大谷学部長)

- ・資料1-1①②に基づき、数理・データサイエンス・AI教育プログラムやキャンパス内の森づくり、県内高校生と学生との交流会のほか、地域活動・ボランティア、留学・海外研修、クラブ活動や大学祭、就職の状況等を紹介。

○子ども育成学部の概況について (松山学部長)

- ・資料1-2①②に基づき、学内交流行事や短大との合同大学祭、進路実績、資格取得に向けた各種実習のほか、地域活動、「学外活動の日」や国際化・情報化を柱とする特色ある活動の状況等を紹介。

(2) 教育の質保証に関する報告

○教育の質保証、学修成果の可視化について (佐藤センター長)

- ・資料 2-1 に基づき、WebClass 修学カルテシステムと CampusPlan 学生カルテシステムを活用した学修成果の把握・可視化(「授業科目と関連した DP 達成度」「能力特性評価テスト」「自己評価シート」)の記録・グラフ化、学生相談記録の入力・閲覧等)を紹介。

○IR センターによる分析（新森センター長）

・資料 2-2 に基づき、「学生は大学 4 年間で自らの成長を実感しているか？」と題し、2024 年 3 月卒業生について「DP 達成度と自己評価の相関分析」を行った結果（現代社会学部と子ども育成学部の各々の分析内容）を紹介。

【意見・質疑応答】

（大橋委員長） 先般、射水市に新しい大学ができるという報道があった。私立大学がただでさえ厳しい環境にある中、ますますレッドオーシャンになるものと考えているが、そんな中でどういう戦略を以てこの大学を発展させていくかということについて、皆さんも関心を持っていることと思う。（意見・質問（審議）について、）よろしく願います。

（蒲地委員） 現代社会学部の「県内高校生との交流会」について雄山高校のケースを紹介されたが、他の高校でもずっとやって来て 2024 年度が雄山高校だったのか、それとも雄山高校が初めてでこれから順次やっていこうと考えているのか。また経営情報専攻においてアカデミックインターンシップを行われておりとてもよい取組みと思うが、せっかくなら観光や環境デザインなど他の専攻でも実施されてはどうか。委員長から大学新設の話もあったが、一方で高岡法科大学の学生募集停止や全国における私立大学の充足率低迷の話もある。こうした中で富山国際大学は充足率が 100% に近く素晴らしいことだが、それを維持するためにも前述のような取組みを積極的に展開していくべきと考える。

（大谷学部長） 「県内高校生との交流会」は、雄山高校側の出席者も多く、現代社会学部のみならず子ども育成学部の学生も参画し、大学全体として交流を深めることができた。他の高校からも、従来から本学教員に対して単発で出前講座の依頼を寄せられるようなことはあったが、今回のような形での交流会は今年度が初である。また、雄山高校出身の本学学生が参加したことで非常に大学に対し親近感を覚えてくれたということもあり、よい試みであったと考えている。アカデミックインターンシップについては、昨年度、英語国際キャリア専攻が中心となって実施した。限られた教員のマンパワーでは 4 専攻同時にというのが難しく、持ち回りでやっている状況。

（蒲地委員） 雄山高校は、同校出身の学生が多いという特色があることで選ばれているのか。とすれば、他の高校で（例えば雄山高校に次いで）出身者の多いところがあれば、そこでトライすることも可能と考えてよいか。

（大谷学部長） お見込みのとおり。

（蒲地委員） 子ども育成学部の特色ある活動の中で、GIGA スクール構想に対応した授業力向上の取組みがあるが、弊社もデジタル教材の開発に取り組んでおり、教育を専門的に学ぶ学生がどのように考えているか関心がある。いずれ連携することが可能であるかお聞きしたい。

（松山学部長） 学生たちも現場に行ったときにどうだろうか、といったことを考えながら熱心に学習に取り組んでいるところであり、意見交換や情報共有する機会があればぜひお願いしたい。

（蒲池委員） IR センターによる分析については、学生だけの問題なのか、それとも大学の教育が、学生にとって思っていたものではなかったから、という結果なのかが気になった。「自分は頑張っているのだが成績にきちんと反映されていない・正しい評価が行われていない」と考えている学生がいるのかな、という懸念を抱いた。

（新森センター長） その面はあり、教員側にも反省すべきところがあるのではないかと思う。

（蒲池委員） 学生にもフィードバックし、学生とのやりとりの中で解決策を探ってはどうか。

(東出委員) 厳しい中であって充足率がほぼ100%であり、これまで培ってきたこと、長年にわたり継続して取り組んできた様々な取組みが実を結んでいるのだと感じた。教員と学生との距離感が近く、地域の活動を行いながら、活発に学生生活を送っているように見受けられる。子ども育成学部の学生らと先日お話しする機会があったが、ものすごく明るく元気で、本当によい学生たちであると思いきや接することができた。進路実績においても、全国や北陸地区で見ても成果を挙げており、学生たちだけでなく教員も大変頑張っておられるように思う。ただ、これからが課題。子ども育成学部は目的もしっかりしているので、IRセンターの分析にも表れているが、自分のイメージしているものがどんどん自分のものとなり、就職が目の前に近づいてくるという達成感があるものとも考える。現代社会学部の方は、専門性はあるものの、もう少しぼやっとしているのではないかと。例えば観光の場合、何となく旅行が好きだから勉強をし始めたが、というときに、では実際どのようなステップでどのようなキャリアを目指すのか、海外でこういうことをしたい、ユネスコで働いてみたい、など、もっと明確なビジョンを掲げながら学生生活を送れるようなプランがあれば、やりがい・勉強しがいがあり、成長実感も得られるのではないかと。WebClass や CampusPlan のシステムは、一人ひとりの4年間の貴重な学生生活を、成績のみならず、「実感」や教員とのやりとりも目に見える形で残せるものであり、有効（自社でも取り入れたいくらい）な素晴らしい取組みであると思う。

(中島委員) 昨年、子ども育成学部はドロップアウトした人が一人もいない、というお話があり、本当だろうかと聞いていた覚えがある。私も実験関連でいくつかの小学校を訪れており、訪問先の校長先生に「富山国際大学の学生さんはどうなんですか？」と聞いたところ、他のところの学生さんと比べ非常に元気であると。また、早いうちから現場を体験しているからか、良いところも悪いところも分かっているこの職業を選んだ人が恐らく多く、そういう意味では打たれ強いところもあって評価は高い、ということを知っていた。去年聞いたことが実現されているのだと思いきや嬉しくなったのでお知らせしておく。続けて質問したい。新森先生がいらっしゃるからこの辺が強いのだと思うが、数理・データサイエンス・AI教育プログラムは、現代社会学部のみ認定を受けているのか。

(大谷学部長) 子ども育成学部の方もリテラシーレベルで認定を受けている。

(中島委員) 富山県立大学では、富山県において情報の免許を有する教員が少ないことを受け、大学院に進学した県内学生を対象に免許を与える制度を設けている。(当該制度の)1年目に手を挙げてくれた学生が1名いるが、専門知識を持っていても現場で教えるということになるとまた別であり、「専門ができる人に教育の現場へ」とは逆のアプローチとして、現場が分かっている人たちに、数理・データサイエンスのトップレベルの知識を持ってもらえれば鬼に金棒、という考え方もあると思いつきながらお話を伺っていた。可能ならばそういう学生を育てていけるとよいのではないかと。また、IRセンターによる分析のところ、(現代社会学部は)3年生になると(グラフの傾きが)少し下がり好ましくないというお話もあったが、自分は当たり前ではないかと考える。子ども育成学部の方は、4年生になり実際に自分があと一年経つと現場に出てくということ、専門をよく学ぶことになり急に傾きが上がるが、現代社会学部の方は、先ほど東出委員からも言及があったとおり、よくわからない状態でまだ3年生までおり、本当に自分がこれをやらなければ、こういう風にしなければと思いきや少しずつ上がっていくような感じになるのかと。逆に言うと現代社会学部では、3年生までは、専門性だけを持っているとすれば、そこは強いかもしれないけど、社会へ出たときに大丈夫なのかなということも思うのではないかと。このため、数字・(グラ

フの) 傾きが高くなったからよいというお話でもなく、カリキュラムが何を目的とし何を狙っているから、3年生まではこういう状態で4年生になると専門性が高くなる・社会性が上がる、そういうところをきちんとやってこういう結果です、と主張できればよいのではないか。グラフの傾きが横だからダメということでもないのかなど。まだ(サンプル)数が少ないだろうし、こういう数字が見えるようになってきて、今後どのように教員や学生が変わってくるかということに興味がある。もし来年もチャンスがあれば、その結果を聞かせてもらいたい。

(松井委員) 定員の充足率や退学率、就職の状況などもお聞きし、学生さん自身の努力や、先生方の細やかな配慮、ご指導があってこそその数字であるかなと思ひ見させていただいた。学内外問わず、学生さんが自己肯定感を高められるような充実した取組みをされていること、また、学外に出てボランティア活動など社会貢献もされていることを伺い、素晴らしい取組みをされていると感じた。私は保育現場に勤めており、意見が保育や幼児教育という分野に限定されるかと思うがお話しさせていただく。昨今、国では、少子化の進行や多様な保育ニーズの高まりということで、こども真ん中という言葉が叫ばれている。子どもたちや子育てに優しい社会を作っていくことが大切であると私たちは常日頃思っているところで、その一端を担う私たちの現場では、職員間のコミュニケーションを図りながら、未来ある子どもたちを支えていくということを感じている。こうした背景から、富山県保育士会においては、魅力ある職場づくりを目指して、昨年度より、現場の保育士と、養成校の先生方や学生さんが共に研修会に参加するという取組みを行っている。養成校の先生方や学生さんからは、「現場の声を聞く良い機会になった」「自分が保育士になったときには保育の魅力を語る事ができるとよい」という声が聞かれ、現場の保育士からは、「年数に関係なく、保育の仕事に魅力を感じている仲間同士で意見交換することによりとても視野が広がった」という声があるなど、双方から前向きな感想が寄せられ実り多い研修会になっている。今後とも保育に携わる全ての仲間できのうに連携と協働を図っていききたいと思っており、引き続きよろしくお願ひする。保育現場が直接学生さんと触れ合える機会というのは、主に実習という場面になってくる。実習経験は、悩みや不安もある一方で、この時にしか味わえない経験や、また次につながる経験ができる有意義な機会であり、保育の魅力をさらに感じる事ができるかけがえのない時であると思ひている。私たちにとっても、学生さんの新鮮な思ひや姿から学びを得られるのも事実。そこで、学生さんが実習で得られる充実感ということのほか、逆に不安や迷いなどがあるようであれば、具体的にどんな声が学生さんから上がっているのかということ、分かる範囲でお聞かせ願ひしたい。私たちも現場に生かしていきけるのではないかと思ひう。

(松山学部長) 実習に参加する学生と話をする機会はよくあるが、学生にとっては現場に触れて、そして何よりも子どもさんたちと一緒に過ごすということに影響を受け喜びを感じているようである。今お話になった中で一つ気になることといえば、決して問題があるというわけではないが、やはり大人との関係が挙げられる。職場の中の大人との関係ということについては、初めて接することもあり、ハードルが高いという意識を持つ学生も多いような気がする。本当に色々な場面で丁寧にご指導いただき、勉強させていただいているが、大学生が本当の職場の中に入ると、すぐには適応できない場合もあるので、先ほどお話があったような機をもらえると、一層充実した学びにできるのではないかと思ひう。こちらとしても働きかけてまいりたい。

(清水委員) Webclass 修学カルテシステムと CampusPlan 学生カルテシステムに関連して、「必要に応じて就学面に限らず、生活面における諸問題等についても面談を通じて把握」とあり、教職

員が個別学生の面談を少なくとも年に1回は実施しているという発言もあったが、教員一人あたり何名の学生を担当されているのか。1年間あたり20~30名か。

(佐藤センター長) 1・2年生のゼミ担当教員は、1クラス十数名、また3年生、4年生のゼミいずれも各学年5~10名程度を担当している。基本的に教員は3つのゼミ(教養ゼミ×1、3年ゼミ、4年ゼミ)を担当することになる。

(清水委員) 内容として生活面の問題ということでお話をされることもあるのか。

(佐藤センター長) そうした場合もある。大学として年に1回は面談を行うこととしているが、学生の方から相談を寄せられるケースもあり、常に受け入れて面談対応を行っている。

(清水委員) 子ども育成学部は退学率が0であり、現代社会学部もかなり退学率が低いが、大学生生活を継続していくことが困難という形で、生活の課題などが現れることはないのか。

(大谷学部長) 子ども育成学部は専門職養成の学部なので、入学する時点でゴールの明確な学生が多いのであると思う。現代社会学部の学生は、必ずしもピンポイントに、明確に自分が就きたい職を意識できているわけではない。先ほど東出委員からご指摘いただいた際の「明確なキャリアビジョン」というキーワードも、非常によく理解できる。元々明確なキャリアビジョンを描けていない学生がおり、また色々な問題を、あるいはメンタル的に抱えているケースもある。今、本学教員が、多くの労を割いて学生とコンタクト・連絡を取り、それでもなかなか返事が来ないといった学生も、中にはいる。ということで、学生を放任した結果退学率が現在の状況になっているわけでは決してなく、色々手を尽くした上で、やむを得ず退学に至る学生が一定数いる、というのが事実である。

(清水委員) どちらの学部も、県内出身の学生が多く(県外出身の学生があまり多くなく)、県内での就職がメインと考えるが、このことはもう少しウリにしてもよいのではないか。いま県外流出が結構問題視されているので、もっとアピール・PRされてはどうか。

(田村委員) 1期生の卒業生ということもあり、本委員会に参加させてもらい大変嬉しく思うとともに、これだけ詳しい説明を聞かせていただきありがたい。他の委員からも言及のあった退学率の低さは、去年もそうだったが、本当に教職員の方々のご努力、環境づくりによるものかと思う。また、今回のご報告をお聞きし、2年ほど前までは大学生の皆さんがコロナ禍により活動を制約されていたが、今の大学生は授業を含め充実したキャンパスライフ・大学生活を体験できているのだと感じ、こうしたことも退学率の低さの一因ではないかと考えた。他の内容に関し数点お聞きしたい。数理・データサイエンス・AI教育プログラムについて、我々(企業)も最近では生成AIを色々なところで、仕事上でも活用してきているが、大学の中でこういった分野の教育に力を入れておられるのか、それとも少し分野が異なるのか。

(新森センター長) 生成AIについては、こういうものがある、ハルシネーションと呼ばれる間違った情報が出されることもある、それから自分が入れたデータが学習に使われてしまう危険性がある、そういったことは教えている。ただこれは、全体のAIの流れから言うとわりと小さい最近の出来事であるので、そればかり教えるわけではない。危険性や注意点を教える、という感じでやっている。

(田村委員) 現代社会学部の活動にあった、県内高校生と同校の卒業生で進学した子たちの交流会は本当に良い取り組みだと思う。自分の頃も、県内のいくつかの高校から、(当該高校の)いわゆる内部進学大学か、という感じで卒業生がたくさん来ていたので、雄山高校が今回単発に近いというお話だったが、定例化し少し広げれば、高校生の心に響く部分があるのではないかと感じた。また地域活動、ボランティアの活動について、当社に就職している富山国際大学卒業生等と話し

ていても、こうした活動に対する興味がとても強いように感じる。今回のご報告としてはそこまで深掘りされなかったが、学校活動の中では力を入れておられるのか。

(大谷学部長) 大学の中での関与の仕方としては、学生支援担当に、ボランティア関連の情報が集まって来て学生に紹介しており、学生は当該情報を通じて知り・参加することができる。また、実際に地域に出かけて行く場合、かなり授業やゼミに関連付けてやっているというところがある。一番典型的な例は、1年生の必修授業である地域づくり実習になるが、専攻実習についてもそうであるし、各教員の専門性を生かしそれぞれのゼミ・研究室においても行っている。本学には、地域とのパイプを構築することに長けている教員が多数いるので、その辺の強みを生かして実際に地域で活動し、それが結果としてボランティア的なことに、地域貢献になっているということかと思う。

(田村委員) 子ども育成学部において、短大との合同大学祭の報告があった。今年の夏に、富山国際大学の同窓会総会を初めて呉羽キャンパスで開催させてもらったが、自分もなかなか同キャンパスに入ることがなかったのでよい機会となった。短大と子ども育成学部との合同開催もよいが、東黒牧キャンパスとも、日程調整や連携において難しい面があるとは思っているものの、同じ大学であるし、何年かに1回でも実施すれば（学部同士の）互いの交流にもなってよいのではないかと。

(大橋委員長) 各委員のご発言、それぞれごもっともだなと思いついていた。子ども育成学部においては、実習があり、社会に出る心構えが醸成されているのだろうと思う。現代社会学部においても、企業訪問はされていると思うが、企業へのインターンシップなども充実させていけば、将来に向けての目標などがしっかり定められるきっかけになるのではないかなと感じた。それから留学生について、韓国や中国から今来てもらっているが、これからグローバル化がさらに進展し、かつ、VUCAと言われる時代の中で、多様な考え方を学ぶということは大事だと考える。同質の中にずっといるよりも、異質なものと触れ合うことによる学びは非常に大きいと思うので、可能であれば、もっと別の連携大学等からの留学生を受け入れると学生にとっては良い学びとなるのではないかと。また冒頭でも申したが、射水市に新しい大学ができようとしており、そこは経済経営学部ということで、どちらかという現代社会学部の競争相手になるのではないかと。自分が向こうの立場で言うと、やはり競争相手をしっかりと研究して、そこにはない魅力的なものを作ろうと思う。現在、定員充足率は高いものの、やはり割れているというところは課題になってきて、SWOT分析でいうところの脅威が、さらに大きくなっていくのではないかと考える。この辺、しっかり明確な戦略を立てていかれる必要があるのではないかと感じたところ。各委員から様々な課題も出されたが、一方で、運営は適切に行われており、改善に向けた取組みがされていることも皆さん仰っていたので、外部評価委員会として、富山国際大学の取組みがしっかり行われているということを確認して終了としたい。（→全会一致です。）

5. 閉会

(以上)